二葉館あれこれ Vol.2

初夏（全体）

文化のみち二葉館には「初夏」（大広間西側）・「踊り子」（大広間南側）・「アルプス」（1階展示室1）・「もみじ」（2階展示室7）の4つのステンドグラスがあります。

今回発見されたのは「初夏」の一部で、右側のシャクナゲが描かれている部分です。

製作は宇野澤ステインドグラス製作所、デザインは杉浦非水であるといわれています。宇野澤ステインドグラス製作所は、日本で最初にステンドグラスを製作したといわれる宇野澤辰雄が明治23年（1890年）に創業した日本で最初のステンドグラス工房です。

杉浦非水は福沢桃介の義弟（桃介の妹・翠子の夫）で、日本初のグラフィックデザイナーと言われる人物です。

研究者の話によると、非水デザインのステンドグラスで今のところ現存の確認が取れているのは「初夏」のみだそうです。

しかしこの「初夏」もすべてがオリジナル（創建当初のステンドグラス）ではなく、左上・右上・右側（今回発見された部分）は古写真を参考に復元されたものです。

「踊り子」も非水のデザインと言われていますが、オリジナルではなく、古写真と図案集（世界人物図案集）等を参考に復元されたものです。

大正9年（1920年）頃に創建された川上貞奴邸は、昭和12年（1937年）に敷地の一部（約2000㎡）と建物が川崎舎恒三氏（当時、大同製鋼常務取締役）に売却され、残りの敷地（約6500㎡）は分割して処分されたため、洋館部分（建物の東側）は解体されました。残された和館部分（建物の西側）の増改築には解体された建材の一部が転用されており、ステンドグラスなど現存している部材もあります。

転用されなかった部分については不明ですが、今回発見されたステンドグラスはその頃に外部に流出したのではないかと思われます。

約80年の時を経て再びこの館に戻ってきたステンドグラスが本物であるかどうかを判断するため、建物の痕跡調査及び復元工事にかかわった田辺千代氏（日本のステンドグラス史研究家）と松本一郎氏（松本ステインドグラス製作所）による比較調査が行われました。

古写真との比較調査では、トチノキの幹の部分の模様が一致すること、シャクナゲ等の花弁や葉の枚数・デザインが一致することが判明しました。

また、オリジナルとの比較調査では、透明部分・青色系部分・赤色系部分のステンドグラスの型が一致することが判明しました。

さらに、復元部分との比較調査では、寸法が一致することが判明しました。復元部分は隣接するオリジナルの寸法と古写真から読み取れる比率を基に復元されているため、創建当初の寸法を再現しているといえます。

以上の調査結果から、「このステンドグラスは本物である」という結果が得られました。

今回発見されたのはシャクナゲの描かれている部分だけでしたが、行方が分からない他の部分や「踊り子」もいつか見つかるかもしれません。貞奴や桃介が見た美しいステンドグラスが当時のままの姿で蘇る日が来るといいですね。

初夏（発見部分復元）

オリジナル

文化のみち さんぽみち ②

「禅隆寺」

文化のみち二葉館を出て南に進み、飯田町の交差点を東に曲がってほどなく、左手にどっしりと風格のある山門が開かれたお寺があります。ここは禅隆寺、臨済宗妙心寺派の末寺で山号は宗興山です。山門に掲げられる扁額は、江戸中期の高僧白隠（はくいん）禅師の筆によるものです（現在修復中）。尾張徳川家八代、九代藩主生母の菩提寺でもあるため、門帳には葵の御紋があります。

禅隆寺は、元和九年（一六二三）に尾張徳川家初代藩主義直より寺地を拝領して、義直の執政を務めた平岩親吉の弟・元山甫隠（げんさんほいん）によって創建されました。ご本尊は義直が寄進した木造釈迦牟尼仏坐像です。現存の山門は安永三年（一七七四）に再建されました。

山門を入り本堂に向かって左にある観音堂は、織田家ゆかりの観音堂を清州越で移築されたと伝えられており、その御堂の格天井には「織田木瓜（もっこう）紋」が描かれています。

本堂前に広がる庭は、「山水菩薩庭園」と命名された枯山水で、前住職の構想で作庭されました。

霞月庵

本堂側から見て、中央の石橋の下を流れる川によって世界が二つに分けられています。向かって左側が現世、右側が極楽浄土になり三尊石（さんそんせき）が配されています。中央の高い石は観音菩薩を表し、様々な色の苔は山の木々を表しているとのことです。

枯山水を取り囲むようにあるもみじは、こぼれた種から芽吹いた木なども移植して増やしたそうで、今では美しい「紅葉寺」としても知られています。

また本堂を抜けた内側には、築山に建てられた茶室「霞月庵（げつあん）」があり、風情ある中庭に落ち着いた佇まいを見せています（通常は非公開）。

今は緑のもみじも、秋には真っ赤に紅葉して庭に彩りを添えます。四季折々の表情を楽しめる禅隆寺、二葉館へお立ち寄りの際に、一足伸ばして静寂の庭を訪れみてはいかがでしょうか。

※庭内のみ拝観自由です。

from Archive 書庫棟から

今回は、秋の企画展『阿久根治子ー古事記に魅せられた女流作家』とその裏側をご紹介します。

作家・阿久根治子は昭和8年に名古屋市で生まれました。愛知県立女子短期大学にて初代学長の国文学者・高木市之助に師事し、日本古代文学を研究しました。それにより後の文学活動の方向性が決定づけられたのかもしれません。

昭和30年代後半から童謡、童話、現代詩、エッセイなどが中日新聞紙上に多数掲載されるようになり順風満帆にみえた彼女ですが、昭和39年（31歳）に突如心臓発作で倒れます。重い心臓病を患いながらも創作活動を続け、昭和44年に代表作である『やまとたける』を書き上げました。この作品は第16回サンケイ児童出版文化賞を受賞しました。病を抱えつつその後も精力的に創作活動を行い、平成25年に80歳でこの世を去りました。

阿久根治子が亡くなった後、ご遺族から名古屋市に数多くの資料が寄贈され、資料は現在文化のみち二葉館の書庫に収められています。分類、整理、調査を進め、一部を秋の企画展で公開します。

阿久根治子の遺した資料は、著作本や児童書、直筆原稿や創作ノート、日本古代文学の書籍などの参考文献、自身の作品が載った新聞の切り抜き、日記、スケジュール帳、作家や学者からの書簡など様々なものがあります。資料に挟まれた何気ないメモに触れるとき、さうさまでそこに阿久根さんがいたような気持ちになります。

企画展では阿久根治子作品とその背景をご紹介します。この秋はぜひ阿久根治子の世界に触れてみてください。